

いの流水俳壇

間 浩太選

「当季雑詠」

深々と落葉だまりの音を踏む

(評) 晩秋から冬の間に落葉樹のほとんどが、葉を落としてしまう。岡本とも子

昔から和歌に、近代は俳句に落葉について句歌は非常に多く、季語も多い。

(木の葉の雨、木の葉散る、枯葉など)

歳時記でも落葉の例句は大変多いですが、落葉降る、落葉踏むなどが俳句の季語として使われていて、落葉の音を踏む句歌は歳時記で見つけられませんでした。

この句で「音を踏む」と詠んだのが変わっていて俳人らしい言い方だと思えました。

落葉踏む、落葉散るとの言い方は、常識的であり、当たり前前の方が俳句では常識的な言い方は、良いとは言ってくれません。

この句は「音を踏む」としたところがお手柄です。

草木に恵みの雨ぞ春近し

森岡 照月

(評) 春近しは、歳時記では春ではなく冬の季語(晩冬)となっています。

冬の終わり、春の近い訪れを待つ心で

しよう。

似た季語に「春を待つ」がある。「春近し」よりもっと主観的で待ちわびる心が強い。

冬も終わりのころになると寒さも緩んで、まず空気を透かして見る景色が異なってくる。

雑木林の枯枝の色がけぶるような柔らかなになる。これが春近しである。

この句は今年の二月上旬、二月中旬ごろの天候は良いが風があつて寒い日が続き、畑仕事もできなかつたので、雨の欲しいときがあつた状況を詠んだものだと思いますし、作者の春を待つ気持ちが見とれます。

高々とあかきオリオン海の駅

島村かりん

(評) 冬の星々はいずれも魅力的だが、天頂を流れる冬銀河の東南に、三つの星が見えるが、それがオリオン(三ツ星)座で鮮やかに浮かんでいる。二月上旬の夕暮れに、南の空に現れるので、「三ツ星が来た」などと言われ、冬の言葉を入れないでも冬の季語として使われている。

この句の「海の駅」の意味は、私にははつきりしませんが、オリオンは、海に見える場所の人には、南の海からオリオンが上がるので、オリオンが出るところを海の駅といわれたのでしょうか。

山口誓子の句に「海を出し寒オリオンの滴れり」がある。

春めきて老犬乗せる乳母車

岡村 嘉夫

(評) 寒さが緩み春色が目に見えて濃くな

ると万象生き生きして春らしくなる。

二月、三月のまだ寒い中にもすべてが春めいてくる気配が感じられるのである。「めく」とはその兆しが見えてくる意で四季それぞれ使えるが、ことに「春めく」が情感が最も豊かである。

春めくとこの句のように、犬も飼いまも家の外へ出たがり、小型の老犬は抱いて歩いたりしますが、乳母車に乗せて散歩することを詠んだ句で面白いし、飼いまも運動できて生活の一コマです。

草おぼろ欠けし句なぞる句碑の庭 片岡 包女

麦の芽や峡の生活をいとおしむ 竹崎 光子

春立つや向かいの鶏も鳴き交じり 川村 博子

鬼やらい心の鬼に豆を打つ 大川 節弥

歩行器に足をあずけて春を待つ 井上 郁子

マスクして老いの会話の噛み合わず 刈谷 志津

猫舌のわたし猫にはなれぬ春 東谷 晴男

空風や卒寿うべなう生返事 松尾満津於

昨日とは変わりし日射し春立てり 友草 水月

愛情の深さへ雪の溶けてゆく 竹崎たかひろ

寒の芹溝にかたまり青き艶 弘瀬うき子

寒の鴨身を寄せ合せて静かなる 津田 久美

ただ寒し思考回路のヒューズとぶ 間 浩太

次 題 「当季雑詠」五句

締め切り 毎月五日

投句先

社会教育課

いの町3597
893-2012

最低賃金のお知らせ

● 高知県最低賃金 1時間 **645円**

● 一般貨物自動車運送業 1時間 **910円**

● 電子部品・デバイス・電子回路、電子応用装置、映像・音響機械器具製造業

● 道路貨物運送業 1時間 **720円**

1時間 **738円**

▶ 最低賃金についての問い合わせ

高知労働局 賃金室
高知労働基準監督署

☎ 885-6024
☎ 885-6031